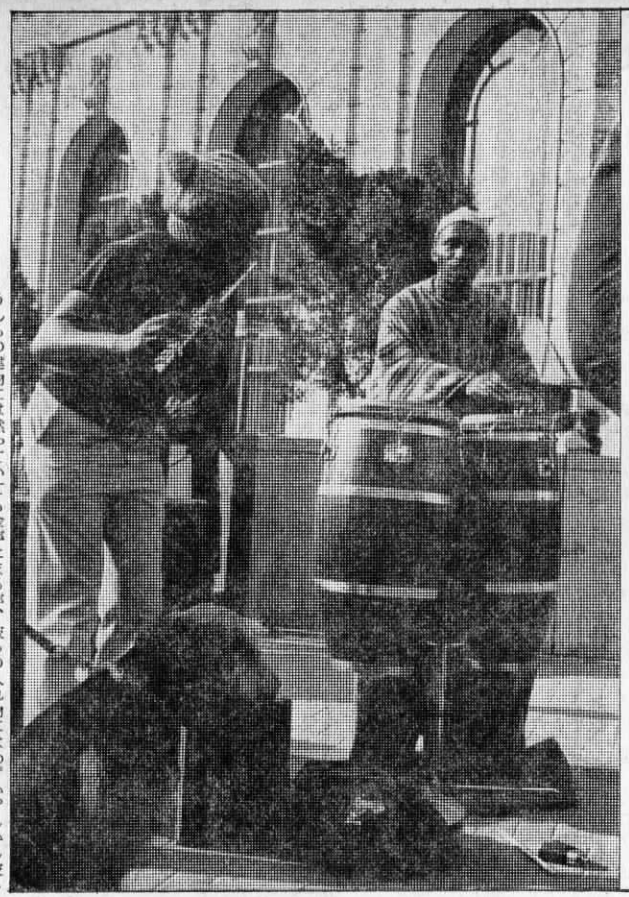
アメリカの遠い太鼓

——合州国に生れる黒人独立国——

編集部・石井信平



うしろの建物には黙っていても金がたまるが、彼らの入れ物にはわずか。しかし彼らは楽しそうだ。犬も聴いている。（サンフランシスコのアメリカ銀行の前で）

「そして、いかなる政体といえども、もしこれらの目的（生命、自由、幸福の追求）を毀損するものとなった場合には、人民はそれを改廃し、かれらの安全と幸福とをもたらすべしとみとめられる主義を基礎とし、また権限の機構をもつ、新たな政府を組織する権利を有することを信ずる。——」

『アメリカ合州国独立宣言』より

ニューヨークで触れた黒人のジャズと踊りのスゴサに私は参ってしまった。オフ・ブロード・ウェーで見たミュージカル "Let My People Come" では舞台に登場した十二人の白人の男女優が素っ裸かになるなかで二人の黒人（女優）だけが脱がない。二人はあたかも白人の解放の儀式に立ち合う司祭のようにアフリカ衣裳をなびかせて歌い踊る。彼らの感性は既に解放されて、その肉体は宇宙のリズムに呼応して美しく汗ばむ。そしていま、彼らは何を闘かおうとしているのだろう。

＊

アメリカ合州国に北半球で初めて、黒人の黒人による国家がつくられようとしている。

井上ひさし氏の「吉里吉里人」によって日本国内の〝独立〟の問題を追う小誌編集部の

私は、黒人の独立国をアメリカの中につくろうとする運動とニューヨークで接触した。この新しい独立国は「新アフリカ共和国」（RNA＝Republic of New Africa）と称し、独立宣言をもち、憲法と国旗をもち、議会と行政府をもち、法律と裁判所をもち、民兵組織による軍隊をもつなど、独立国家としての機能をすでに保持している。

残されている課題は二つある。

一、現在アメリカ合州国に住むすべての黒人に対し、この国家に帰属するか否かを問う国民投票（Plebiscite）を実施すること。

二、この国家が主張する領土（ルイジアナ、ミシシッピー、アラバマ、ジョージア、南カロライナ）をアメリカ合州国政府が平和的な話し合いによって割譲を承認すること。

＊

一月二八日、ニューヨーク刑事裁判所で、私はブラックパンサー党の被告（警官殺害容疑）の裁判を傍聴した。法廷に入るときカメラとテープレコーダーをとり上げられ、両手両足を広げて壁に立たされ、警官によるすさまじい身体検査が始まった。ポケットの中、ベルトの裏側はもちろん、衣類のあらゆるぬい目にそって身体中をなでられ股間の急所まで握られた。まるで犬をねじ伏せる様な激しいものだった。私にそれをした警官は黒人だった。

この検査は、少しでも政治意識をもった黒人が被告である場合、特に厳しいという。このことは今、アメリカで黒人がおかれている立場をよく現わしている。彼らは自由だ。しかし、政治的には自由ではない。あるいは、黒人に政治的自由を与えることは現在の政治権力にとっては恐怖だ。「過激」派に耳を貸さず、彼らを「暴力」しか使えぬ状況へ追い込む。それはワナだ。

この法廷の傍聴席で私の隣に坐ったのが、ヘビー級のボクサーのようにたくましい、RNA国連担当相クワブラ・ウンタワブだった。

＊

「新アフリカ共和国は存在し、かつ機能している」クワブラは私に断言した。

クワブラとはスワヒリ語で「火曜日に生れた」ことを意味し、ウンタワブとは「神の火」を意味する。RNAの市民権を選んでこのアフリカ名を名乗る前、彼は「ジョン・ウィリアムズ」だった。彼らのことばではそれは奴隷名（マイノ・ネイム）だ。この名は、ウィリアムズ家が彼の父祖を奴隷として所有していたことを意味する。その名は、彼にとって屈辱だ。

二月二日、ハーレムのコーヒーショップで彼は四時間にわたって私にしゃべりつづけた。その雄弁はまるで長いソウル・ミュージックだ！　私は彼の話をもとにこのレポートを書いている。RNAの歴史を簡単にみてみよう。

＊

一九六八年三月三一日　五〇〇人の黒人民族主義者がデトロイトに集まり独立宣言を起草し国名を「新アフリカ共和国」（RNA）と命名する。

同五月二四日　アメリカ合州国政府（ジョンソン政権）に対し新国家の存在を正式に通告し、領土と賠償に関する話し合いを申し出たが合州国政府は返答を拒否する。

一九六九年三月三一日　デトロイトのニュー・バプティスト教会で開かれていた婦人、子供を含むRNAの集会を警官隊が包囲し銃を乱射。RNAは応戦し、警官側に二人の死者をだし、黒人の多数が負傷し一四二人が逮捕される。

一九六九年四月　アメリカ合州国新大統領ニクソンに国民投票と領土についての話し合いを申し出る。ニクソンは返答を拒否する。

一九七〇年三月　イマリ・オバデレ（奴隷

名、リチャード・ヘンリー）RNAの新大統領に選出され、新憲法「ウモジャ（スワヒリ語・団結）法典」が承認される。

一九七〇年夏　ミシシッピー州ジャクソンで定例議会。イマリ大統領はテレビを通じ、平和的な国民投票を準備中であることを声明しジャクソン市当局及び合州国政府がこれに協力することを要請。両者は返答を拒否する。

一九七一年一月　RNA国防相ジョモ・ケニヤッタ宅が放火により全焼。RNA活動家へのいやがらせが続く。

一九七一年六月　ミシシッピー州ジャクソン市ロイス通りにRNAの大統領府と行政府が設置される。

一九七一年八月一八日　午前六時三〇分、合州国FBI及びジャクソン市警察隊三十数名はRNA中央政府の建物を急襲して発砲、RNAは応戦し、警官一名死亡。大統領、副大統領、情報相など女性三名を含むRNA幹部一一名が逮捕され、同年一一月、殺人罪で起訴される。イマリ大統領に七万五千ドルの保釈金が課せられる。

一九七三年四月二日　イマリ大統領、二〇カ月ぶりにミシシッピー州カントン監獄より保釈。その後、懲役一二年が宣告される。現在、その他の容疑で投獄中のRNA幹部はミシシッピー州に七名、ニューヨーク州に二五名。うち三名に死刑が宣告されている。

＊

RNAの活動家は合州国政府による政治的弾圧の危機に常時さらされている。たとえば、一九七二年七月一二日、アメリカ大統領候補マクガバン暗殺容疑で二人のRNA幹部（一人は内務長官）が逮捕された。

マイアミに遊説中のマクガバン候補の宿泊先ドーラル・ホテル前に停車中の乗用車内からライフル銃が発見された。この銃は登録済のものでMBH940のライセンス・プレートがつけられ何ら非合法なものではない。この車を降りてホテル内にいたRNAの幹部の上衣のポケットから、マクガバン氏のホテルの電話番号とルームナンバーを書いたメモ用紙が見つかり、暗殺を意図しているものとして二人が検束され、今なお獄中にある。

彼らはマクガバン氏と事前に打ち合わせ済で、約束の時刻に彼と会談するためにそこにやって来ただけであった。銃は米国官憲と白人の民間人によるテロから身を守るために持っていたものである。射たれれば射ち返すことはRNAの「国防」の権利であり、アメリカではすべての民間人にも認められている正当な防衛権である。今までRNAのリーダー及び「市民」から最初に発砲した事実はない。

一九七一年八月一八日夜明け前のジャクソン市警察隊とFBIによるRNA政府への襲撃は、事前に周到に準備されたもので、RNA幹部へのテロを意図したとしか考えられない。防弾チョッキ、ヘルメット、銃、防毒マスク、催涙弾で完全武装した警官隊は、全く寝静まったRNA中央政府の建物に対して催涙弾を撃ち込み銃を乱射した。これに抵抗して警官一名を殺害したとして大統領から一五歳の少年を含む一一名が逮捕、投獄され、当時三一歳の副大統領ハキマ・アナは終身刑で今も服役中である。

クワブラは二年半の刑期を終え、私と会った二週間前に出獄したばかりだった。

＊

RNAの国旗は、緑、赤、黒の横じまの三色旗である。一番上の緑は解放すべき大地を象徴し、赤は独立の闘いに流す血、一番下が黒い肌を象徴する黒。これは黒人が、現在のアメリカ社会で最底辺におかれていることへのプロテストを意味する。真ん中の赤色の幅が緑と黒の二分の一のサイズであるのは、闘

いに流す血が最小限度であるようにとの彼らの願いのゆえである。彼らの主張する領土が解放された時、黒と緑の位置が入れ換わり、上から黒、赤、緑の順番となる。

＊

一月二九日、ハーバード大学に近いベルモンテの自宅にライシャワー教授を訪ねた時、私はRNAと接触したことを述べ教授の意見を求めた。

「私は、それは今初めてききました。しかしとても真面目には受けとれませんね。それはただのアピーリング・アイディアですよ。黒人の半分以上は南部五州の外に住んでいるし、米国総人口の黒人比率は一割にすぎません。世論の支持がないまま武器のない黒人が独立を実現させるのは不可能だし、全く非現実的です。」

それに対してRNAはこう答える。

「アメリカに住む黒人以外のすべての市民は、自発的にここに移住し、自らの意志でその市民権を得た者か、又はその子孫である。黒人だけが自らの意志に反して奴隷としてこの地に運ばれ、奴隷解放令と同時に〝自動的〟に米国市民にされてしまった。我々は、ただの一度も自分の帰属を決める機会をもたなかった。

我々はまず黒人の意志を世論として確かめたいからこそ平和的な国民投票を要求している。南部五州の領土は我々の父祖がアフリカから連れて来られて開墾し今なお我々の多くが住んでいるところである。黒人は米国総人口の一割だからその一割の土地を要求しているに過ぎない。我々はこの領土の他に黒人一人ずつに一万ドルの現金を賠償としてアメリカ政府に請求する。なぜなら、〝解放された奴隷一人に対し五〇ドルの現金と四〇エーカー（約千二百坪）の土地と一頭のロバを与える〟という『再建法』（Reconstruction 一八六七年南部10州がアメリカ合州国に帰属することを決めた法律）の約束はいまだに果されていないからである。

我々は領土を解放したあとも、そこに住む白人と、そこの外に住む黒人に移住を強制するつもりは毛頭ない。我々の要求は、あくまで黒人が主権を行使できる領土の解放である。」

ある日、私はニューヨークの新聞スタンドでライフ社から刊行されている週刊誌形式の『アメリカの歴史』第一号を買った。表紙に一七世紀初めの北米の古地図が使われてあった。ある部分はニュー・ブリテン、ある部分はニュー・フランス、ある部分はニュー・スペイン、とこの地図上で区分けされた「建国」前のアメリカは、ヨーロッパ諸国家の植民地闘争の舞台であった。そこで勝利したものが「建国」の際に高らかにうたった独立宣言はその理想の高さにおいてアピーリング・アイディアであり、それがこの地上でかつて一度も成就したことがなかったという点でもアピーリング・アイディアであった。そして、この建国と独立の宣言は、いかなる土地も所有することなく、狩り、織り、愛し、暮していた先住のインディアンたちにとって、どのように「現実的」であったのだろうか。

＊

RNA・ニューヨーク顧問、イビドゥン・スンディアタ

かつてRNAの情報相であり、今はニューヨーク顧問である二七歳の女性、イビドゥン・スンディアタをその勤務先であるリバー・サイドの教会連合の事務所に私が訪ねた日は、雪がハドソン河の風にあおられて舞う寒い日だった。熱いコーヒーをいれて迎えてくれたこの二児の母親は、頭にアフロ・ターバンを巻き、スラリと背が高く、知的で政治的でかつセクシーであるという、男子の一生にまれにしかめぐり会えぬタイプの人だった。奴隷名をドロシー・モローという。

「一九六九年三月三一日、デトロイトの教会内での集会に警官が襲撃してきた時、私もその場にいました。赤ん坊や子供までいる集会に向けて彼らが発砲してきた時、私は恐怖のあまり思わず椅子の下に身を伏せました。頭上を弾丸がとびかい、私は震えていました。ふと戸口を見ると黒人の男たちが銃をもって応戦していました。弾丸のとびかう真ん中に立ってです。私はかつて一度も経験したことのない熱い感動に打たれました。その頃、私はアメリカの市民であることをやめてRNAの市民権を選んで一年たっていましたが、その瞬間、私の選択が全く正しかったということ、人間の自由とは何であるかということを了解しました。その銃撃戦で警官二名が死に、私を含めて一四二人が罪人罪で逮捕されました。しかし、その日以来、私は何も怖くなくなったのです。」

毎週日曜日、彼女は監獄を訪ね、獄中のRNA市民を励まし、囚人組合を組織している。「監獄の中でRNA市民は増えつづけています」と彼女は自信をもって言った。

既に新アフリカ共和国の市民であるという自覚に燃えるイビドゥンにとって、アメリカの公民権法案は「外国」のはなしだ。黒人の諸権利を可能な限り認めようとする公民権法案は、歴史の大きな矛盾をおおい隠す小細工としか見えなくなった程に、黒人は既に目ざめてしまったのであろう。クワブラは言う、

「公民権運動は死につつある。我々が欲しているのは公民権ではなく人間の権利だ。」

＊

二月七日夜、私はイビドゥンと二人で彼女の事務所から「ハーレム・ダンス・シアター」という黒人のダンス学校に行くのにタクシーを拾った。無造作にセーターを着た若い黒人の運転するタクシーにはメーターがついていない。そしてニューヨークのすべての官許タクシーのように後部座席と運転席を仕切る回転式金銭皿のついた防弾ガラスもない。見かけは全くふつうの乗用車で、ただフロントガラスに小さなランプをつけていることでそれと分る風変わりなタクシーだった。

イビドゥンの説明によれば、これは「人民のタクシー」と呼ばれ、ふつうのタクシーの黒人に対する乗車拒否があまりにもひどいのに抵抗し、黒人たちは運動を起して市の認可をとり、自前のタクシーを走らせ始めたのである。車は私に必要なだけの距離を走って目的地に着いた。降りる時、一体いくら払うべきかを運転手に尋ねた。

「あなたの好きなだけ払ってくれればいい」

運転手はカーラジオからのアップ・テンポのジャズに気をとられて指でリズムをとりながら、こともなげにそう答えた。私はその時の財布の事情も考慮して二ドルを払い車を降りた。「ありがとう」という元気のいい声が返ってきた。ふつうなら四ドルとチップが五〇セントの距離である。それは、必要に応じてとり、能力に応じて払うという、私にとっては十数分間の共産主義的経験だった。

現在ある政府と社会が、自分たちの意志と利益を反映していないならば、敢えてそれに「お願い」はしない。自分たちは独立して、

自前の政府と社会をつくる。RNAのこの考えは人民タクシーの発想と少しの違いもなく単純明快だ。

＊

私にとっては初めての外国旅行であった。ビザとかパスポートとかの出入国に伴う煩雑さはこの世に国家とか政府とかがある限りなくならないし、それは国家と政府がもたらす災いのささいな一例に過ぎない。この上、新たに国家が生れ、そこに住む人びとを支配する政治権力が誕生しようというのか。

イビドゥンもまた国家の弊害を認めた。

「しかし私たちのしようとすることは、私を含めた黒人を今の状態から解放することであり、完全に平等な人間の関係をつくり出すための第一歩に過ぎないのです。」

たぶんジョージ・ワシントンも、かつてどこかで同じようなことを言ったのだろう。

国家を解体することは、国家を次々につくりつづけることなのかもしれない。国連の広場に百万の国の百万本の旗が立つ日が来たら、今より少しはましな世界になっているだろう。万国博とか万国旗という以上、国はせめて一万ぐらいはあってもいいなあ。

「つまり、あなたがたのしようとしていることは、ベトナム人にとってのハノイを建設することなのですね？」

私の質問にクワブラの大きなバリトンの声が返ってきた。

「Exactly／（その通りだー）」

マルコムXを「建国の父」と呼び、団結・民族自決・共同作業と共同責任・経済の共同化・目的・創造性・信念――この七つのスワヒリ語を新国家のスローガンに掲げる彼らは、「アフリカ社会主義」を基礎に未来を切り拓こうとする。そこでは、食糧、住宅、衣服、教育、医療が国家の責任において無料になるという。残念ながら私たちは、アフリカの植民地史を学び得てもアフリカ政治学を教える講座も教師も日本にもたない。

新聞王ハースト家の令嬢を誘拐し、貧しい人びとへの食糧の無料配給を要求しているSLA（シンビオニーズ解放軍）のシンボルマーク、七つの蛇の頭は、右に見た七つのスワヒリ語のスローガンを象徴している。彼らとRNAとの関係は不明だが、「かつて我々の父祖は母なるアフリカの大地から、その意志に反して誘拐されて来た」という文章がRNAのパンフレットの中にあり、kidnapped（誘拐）ということばの符合は興味深い。

アメリカは先にインディアンの青年によるアルカトラス島占拠という事態を迎え、これを警察と軍隊による鎮圧でおさめたものの、彼らの行動が起した波紋は米国史を改めて読み換える動きとなって深い静かな影響を一般市民に与えた。今RNAによってアメリカは再び歴史のツケを回されて、その支払いに戸惑っているというべきであろうか。

幹部の相つぐ投獄で、裁判費用や保釈金に追われるなど、RNAはその機関紙"THE NEW AFRICAN"も満足に刊行できないほど財政上の危機を迎えている。しかし、クワブラは確信をもって言った。

「我々は二年以内に国民投票を実施し、二五年以内に領土を解放する。」

とすれば、一九九九年、文字通りの世紀末に新しい国が誕生する。奴隷船で運ばれて以来、四百年間をもちこたえた歌とリズムで、その日、ドラムは夜更けまで鳴ることをやめないだろう。

次に、私に托されたクワブラの「独立を志す日本人へのメッセージ」と「新アフリカ共和国独立宣言」を掲げる。

独立を志す日本人へのアピール

黒人はなぜアメリカ合州国から独立するか

新アフリカ共和国国連担当相　クワブラ・ウンタワブ

日本人民に対し、とりわけ心ある日本の友人に対し、我々、新アフリカ共和国臨時政府は、ここにはじめて平和と友好のあいさつを送りたいと思う。

あるいは御存知の方もあるかも知れないが、新アフリカ共和国は、一九六八年三月三一日に建国された。それ以来、アメリカ内部のアフリカ人民は、アメリカ資本主義支配階級の利益を代弁する帝国主義政府という「不法」かつ不正義の統治者から「独立」をかち取るための革命闘争を戦ってきた。しかし、世界の人民は、抑圧者どもがその常套手段である情報の抑圧という手段を弄しているため、「領土と独立」の獲得を目指すこの正義の闘いが存在するという事実についてさえ、ほとんど知らされずにきた。こうした情報の抑圧のねらいは、もちろん、自由と正義とを希求して人民があげる正義の叫び声の正当性を傷つけ、世界の人民に、アメリカ帝国内部がすべて事も無く安泰であるかのように信じ込ませることにある。しかし、新アフリカ共和国独立運動に関する情報が不当に抑圧され、新アフリカ共和国の住民および政府がエスカレートするファシストの攻撃に曝され、無実の人民が黒人解放軍（Black Liberation Army）のメンバーだという口実で白昼殺害される、といった事態にもかかわらず、人民解放闘争は、独立の達成という目標に向って、たゆまぬ前進を続けている。

ところで、我々が独立を要求する根拠は「何か」？　承知の通り、アメリカ内部のアフリカ人民は、過去三五〇年以上の長きにわたって、人類の歴史上他に例を見ないほどの最も悪質な資本制的搾取と、人種主義による政治的自由の抑圧と、社会生活における非人道的差別とを受けてきた。アメリカ内部のアフリカ人民に人権を認めまいとするこの歴史的な試みは、今なお黒人に対する殺害、投獄、日常化した警官の横暴という形をとって続いている。しかも、こうした仕打ちを受ける黒人が犯した唯一の罪といえば、市・州・連邦レベルの警察機構が行なう不当な、いわれのない攻撃に対して自衛することであり、資本制的な経済搾取、人種主義的な政治的自由の抑圧、社会生活における非人道的な差別をはねのけるためにアフリカ人民大衆を平和裡に組織することであり、新しい、そしてより良い生活方法を自ら築こうとすること、つまり、人間が人間を搾取することのない新しい社会の建設を図ることだけなのである。しかも、アフリカ人民は、過去一一一年間にわたって「不法」な統治を受けてきた。つまり、一八六三年の奴隷解放宣言によって奴隷の身分から解き放たれた瞬間から、黒人は自己決定権

という何人も否定できない権利を持つ自由な人間となったはずだった。しかし以前の奴隷主たちは、自由の身となった奴隷に「一民族として、自らの生き方を自ら望む通りに」決める権利を与える代りに、彼らをアメリカ合州国の統治下に置くという意図を持って、「故意に」、そしてまた「一方的に」、アメリカ市民権を与えてしまったのである。合州国政府が一方的に与えたこのような市民権は、黒人の人権を明らかに冒とくしたものであり、したがってまた「合法的」なものとは見なせないのである。

クワブラ・ウンタワブ（Kwablah Mthawabu）ルイジアナ生れ。34歳。ルイジアナ州グランブリング・カレッジで社会学を学ぶ。『マルコムX自伝』に強い思想的影響を受け、黒人解放闘争に参加。入獄歴三回、総計五年。四児の父。

現在、新アフリカ共和国は、アメリカ内部のアフリカ人民が、何らの脅迫も受けずに、自らの自決権を行使するための国民投票を行なう自由を認められるべきだと要求している。我々は、我が民族が、世界の平和を愛好するすべての人民によって認められる民族自決の原則に基いて、また自らの自由意志に従って、次の四つの可能性から一つをえらび取ることを認められるべきだと要求する。

(1)正当な賠償金を受け取り、アフリカへ戻って、新しい生活を開始する。

(2)自分たちの先祖が労働を強いられ、死んでいった土地――ルイジアナ、ミシシッピー、アラバマ、ジョージア、南キャロライナの南部五州が新アフリカ共和国の領土となる――に残留を希望する全員の「合意」に基いて新しい社会を建設する。

(3)自らが移住を希望し、相手方も受け入れる用意のある国へ移住する。

(4)アメリカ合州国の市民権を受け入れ、アメリカ合州国に帰化する。

我々が現在、同胞の間で、以上四つから一つを選択し、賠償を請求する運動を、平和裡に呼びかけていることについては、既にアメリカ合州国政府にも通報ずみである。と同時に、同胞を平和裡に組織しようという我々の活動が万一妨害される場合には、我々は、領土と独立を求める我々の崇高な闘争、正義の闘争を放棄するよりも、むしろ、たとえいかに消耗なものであれ、勝利の日まで革命戦争を闘い抜く覚悟であるということも、はっきりと知らせてある。以上のことから、我々が一主権国家として領土と独立をかち取るために民族解放闘争を「いかに」闘い抜こうとしているかを理解して頂けるだろう。

しかし、一方で我々は、世界の平和を愛するすべての人民から、道義的・政治的支援を求めてやまない。なぜなら、我々が対峙している敵は、その実、全世界共通の敵に他ならないからであり、また、我々がこの敵を打倒する道は、世界的規模における革命的な行動を伴った統一と団結をおいてはほかにないはずだからである！　領土を解放せよ!!

一九七四年二月三日

（森谷文昭訳）

新アフリカ共和国
独立宣言

一九六八・三・三一

我々アメリカの黒人は、我々が栄光ある民族なのだという、過去長い間隠蔽されてきた事実に目覚めたが故に、また、過去三〇〇年以上にわたってアメリカの我が同胞の肉体と魂と精神とを破壊し、傷つけ、ゆがめ続けてきた抑圧に対し我々が集団として、あるいは個人として挑んできたありとあらゆる反抗の当然の帰結として、また、この抑圧から自由になり、また世界のいかなる所においてであれこの抑圧が人類を強襲しているその場でこれを破滅させたいという我々の燃える願いの故に、また、新しいそしてより素晴らしい世界を築くために別の道を歩むのだという、何ものによっても打ち砕かれることのない我々の決意の故に、ここに、我々がアメリカ合州国の支配から、そしてまたアメリカ合州国が、我々の祖先および我々を名前だけの市民にするという一方的な決定によって我々に押しつけた一切の義務から、自由であり独立していることを宣言するものである。

我々は、我々の祖先および我々自身が合州国の不法行為によって蒙った悲痛な損害に対する損害賠償請求権等、世界いかなる所でも人間の正当な権利として認められるもの以外のいかなる権利も、アメリカ合州国に対して主張しようとは思わない。

我々の革命は、我々自身が蒙っている抑圧、そしてまた世界の全ての人々が蒙っている抑圧に対する革命である。それはまた、人類にとってのより良き生活とより良き地位を、そして宇宙の生命現象の全てとのより確実な調和とを希求する革命である。したがって、我々は次のものを我々の革命の目的として掲げる。

——アメリカの黒人を抑圧の軛から解放すること。

——世界中の全ての人々が自由になるまで世界革命を支援し、遂行すること。

——我々が現在知っている社会以上に素晴らしく、また人間に能う限り完全な、新社会を建設すること。

——新社会の全ての住民に最大限度の機会を享受する平等の権利を保証すること。

——勤勉と、責任と、学問と、奉仕とを助長・促進すること。

——信教の自由に何らの制約が課せられることもなく、神ないしは宇宙における人間の運命、位置、目的等を追求する求道の行為も完全に自由であるような状況を作り出すこと。

——いかなるセクトないし宗教的信条も、新社会の建設、新政権の樹立、およびこの宣言の規定する革命の目的達成の努力をくつがえしたり、妨げることのない、黒人の独立国を築くこと。

——人間ないしその環境による人間の搾取を終焉させること。

——両性に平等の権利を保証すること。

——健全な多様性は温存するとしても、皮膚の色の違いと階級の違いに根差した差別を撤廃し、新社会の全ての成員の自尊と、相互の尊敬とを促進すること。

——個人の尊厳性、人格、人としての当然の権利を保護し、高揚すること。

——全ての者に正義を保証すること。

——この地球と、人間の才能および労働とが生み出す富が、社会とその全ての成員によって享受されることを保証するために、主要な生産手段と通商手段を、国家の管理下に置くこと。

——各個人に率先して刻苦勉励し、イニシアティブを発揮し、洞察力を養い、革命に身を捧げることを奨励し、またそうした努力に報いること。

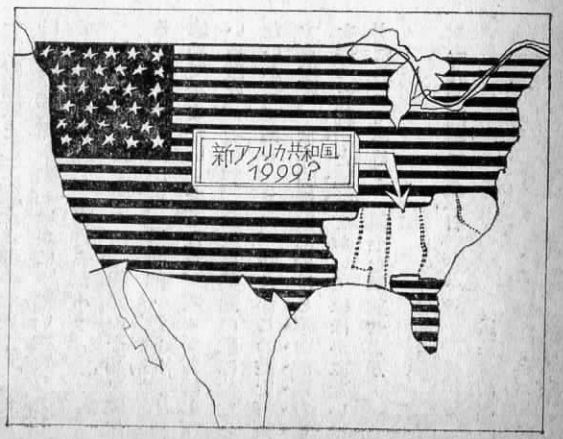
相互信頼と偉大な可能性とによって固く結ばれた我々署名人は、我々自身のために、そしてまた我々に期待を寄せつつもここに署名することのできない人々のために、この厳粛な独立宣言に参加すると同時に、この宣言の主旨を実現し我々の革命を成就させるために、我々の持っている能力と世俗的富の一切を捧げることを誓うものである。

「宣　誓」

ブラック・パワーの実現のために、
また、黒人国家の勝利のために、
私は、新アフリカ共和国と、
より良き世界の建設事業に対し、
私の全ての献身と、私の全ての財産と、
命あるかぎりの私の全ての能力とを
捧げることをここに誓います。

以下署名

（森谷文昭訳）



写真左・今年一月二五日夜、投獄されているRNA最高裁判事、マルチン・ソースター救出を訴えるデモ。ニューヨークのウォルドフ・アストリアホテル前で。この夜、ここで共和党の夕食会が開かれていた。

写真左・一九七一年夏、ミシシッピーでのRNA中央議会。右からイマリ大統領、ハキマ副大統領。この数日後の警官による襲撃で二人は逮捕、投獄された。

抑圧された人民の闘争は国境を越える！

■世界革命戦線情報センター・アッピール

シンガポール・シェル石油基地襲撃―クェート日本大使館占拠四戦士奪還斗争勝利万才！

目ざめよ、わが兄弟同胞諸君！

そして革命を志す全ての人々よ！

世界革命戦線情報センターは誇らかに宣言する。

1月31日、日本赤軍とPFLPの革命兵士によって組織された「バセル・エル・コーバイシ隊」は、シンガポール・ブクム島にあの醜悪なる姿をさらしている国際石油資本（メジャー）のシェル石油基地を襲撃し、9日間にわたる持久戦として貫徹した。

この闘いは、ベトナムの革命的人民によるサイゴン石油タンク爆破闘争に続き、アラブ石油資源の独占を計るアメリカ帝国主義・国際石油資本と、シオニスト「イスラエル」の東南アジアに於ける重要拠点であり、国際ユダヤ資本の存在を許しているシンガポールにかけられた攻撃である。ブクム島のシェル石油基地は、ベトナム・インドシナ人民を日々殺戮している米第七艦隊の燃料補給源としてあったのである。

そして2月6日、シンガポールの英雄兵士奪還のため、去る一九七二年夏、シオニストのテロに倒れたPFLPスポークスマン、ガッサン・カナファーニの名を冠せられた突撃隊は、クエート日本大使館を占拠し闘争を勝利的に貫徹した。合流した両隊の革命兵士、英雄たちは、アラブ・パレスチナ人民の海、広大なるアデン砂漠の中へ帰還していったのだ。

全ての戦闘は、圧倒的な勝利のうちに完了した。

だが、この闘いでもまた、帝国主義者・ブルジョアジー共とヒューマニズムを自らに都合の良いように解釈した人々は、かの英雄兵士の闘いを〝テロだ〟〝人質をとるのは卑怯だ〟などと口汚く罵しっている。

その様な人々には、ハッキリと答えてやろう。

「抑圧された人民の言葉は銃であり、その表現は武装闘争である」抑圧された人民のヒューマニズムは解放のための武装闘争にあることを！

パレスチナ・アラブ人民、そしてインドシナ人民を搾取し続けることによって、今日の「平和」と「繁栄」なるものを手に入れ、安穏と生活している者共に、彼らの闘いを非難する権利があるのか？　否である。断じて否である。

パレスチナ・アラブ人民の闘いが正義であるからこそ、支援・連帯の運動があり、ある者は自らパレスチナへ赴き命を賭して彼らの闘いに参加し、またある者は、その支援・連帯の環を広げるべく日夜奮闘しているのである。

ユダヤ教の聖地エルサレムがあり、二千年前にそこへ住んでいたという、たったそれだけの理由でシオニスト共は、パレスチナの地からパレスチナ人・アラブ人を追い出し、人工国家「イスラエル」をデッチ上げたのだ。

地中海沿岸のオリーブの実る豊かな土地パレスチナ。

シオニストが来るまでは、パレスチナ人、アラブ人、ユダヤ人が平和に暮していた土地パレスチナ。

今、そこはパレスチナ人の手には無い。

石油資源を虎視眈々とねらうハイエナ共の手にある。

ナチス・ドイツのユダヤ人大量虐殺は、確かに悲惨なことであった。

だが！　そのユダヤ人がパレスチナで何をやったのか。ナチスの大量虐殺と全く同じことをパレスチナ人へ行ったのだ。

我々は忘れてはならない。

ユダヤ人のテロ組織である「イルグン」「シュテルーギャング」の手によるディル・ヤシン村での、二百人以上の村民皆殺しをはじめ、その残虐なテロ行為は数限りなく印されている。そして領土拡張の野望は今なお続いているのである。

パレスチナ・アラブ人民の闘いは、単にシオニスト「イスラエル」と闘い、祖国パレスチナを奪還することだけではない。敵は全世界に居るのだ。それは「イスラエル」の後楯となっているアメリカ帝国主義者であり、西独帝国主義者であり、日本帝国主義者であり、それらを陰であやつる国際ユダヤ資本家共であるのだ。

パレスチナ・アラブ人民、そしてインドシナ人民をはじめとする抑圧された人民の闘いに国境はない。敵が存在する限り世界のどこででも闘う。全世界を戦場としているのだ。

敵が結託するならば、その二倍、三倍の闘う人民の団結で闘うだろう。

敵が世界を支配し、闘う人民の抑圧、分断を計る国境をとっぱらう戦争―第三次世界大戦、世界革命戦争の火蓋は切って落されている。我々の父母、兄弟友人、そして恋人が、支配され抑圧され、搾取され続けてきたこの世界を消滅させる闘いが開始されているのだ。この世界を牛耳っている帝国主義者、ブルジョアジー、シオニスト共に対する、赤い反撃の烽火が全世界で高らかにかかげられているのだ。

この醜悪なる〝怪物〟を地上から葬り去るため、いざ〝怪物〟との戦いに起ち上がろうではないか！

一九七四年二月二十六日

世界革命戦線情報センター

（寄稿）